

道徳ジレンマ課題における価値判断と Moral Disengagement との関連

○早坂太志 (上越教育大学大学院)

高橋知己 (上越教育大学)

キーワード：道徳ジレンマ課題, 価値判断, Moral Disengagement

問題と目的

人が欲望や衝動のままに振舞おうとすると、それを抑制する働きとして社会的制裁と自己制裁がある。特に道徳的行動を調整する主要な機能を自己制裁における自己調整機能と呼ぶ (明田, 1992)。こうした自己調整機能がうまく活性化しない場面、つまり自身の道徳的基準にのっとって行動するとは限らない状況に対して自己非難を回避する現象を Bandura (1996, 2002) は Moral Disengagement (以下, MD) と称した。「悪質な違法行為に比べたら、お金を払わずに物を取ることは大したことではない。」「友達をトラブルに巻き込まないようにするために、ウソをついても構わない。」というような自分自身にとって都合のよい解釈をするときに MD が生じている可能性が考えられる。そこで、本研究では道徳ジレンマ課題を与え、選択した価値と MD との関係を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象 A 大学の大学生・大学院生 72 名 (男性 49 名, 女性 23 名)。

調査時期 2019 年 4 月上旬に実施。

調査手続き (1) 道徳ジレンマ課題：早坂・高橋 (2018) の道徳ジレンマ課題の「公共の精神」「思いやり」に対するジレンマ場面において、妊娠している女性を登場人物とし新たに作成した。その場面において、どのような価値を選択するのか判断を求めた。(2) MD 尺度：Bandura, Barbaranelli, Caprara, & Pastorelli (1996) 及びその和訳 (吉澤, 2015) を参考に一部加筆し、「5 とてもそう思う～1 全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた (32 項目)。

結 果

(1) 道徳ジレンマ課題：選択した価値 (利己的価値, 利他的価値, 公利的価値) によって群を利己群 ($n = 14$), 利他群 ($n = 40$), 公利群 ($n = 18$)

に分類した。(2) MD 尺度：Pelton et al. (2004) や Paciello et al. (2008) において一因子構造が確認されているため、Cronbach の α 係数を求めたところ、 $\alpha = .84$ であり先行研究と同程度の内部一貫性が得られたため、信頼性が得られたと判断した。各群を独立変数、MD 尺度の合計得点を従属変数とした参加者間一要因分散分析を実施した。その結果、群により MD 得点の差が有意であった ($F(2, 69) = 7.37, p = .001$)。Holm 法を用いた多重比較によると、利己群の得点が利他群の得点よりも有意に大きかった ($MSe = 129.01, p = .001$)。しかし、利己群と公利群、利他群と公利群との間の得点に有意な差は見られなかった。

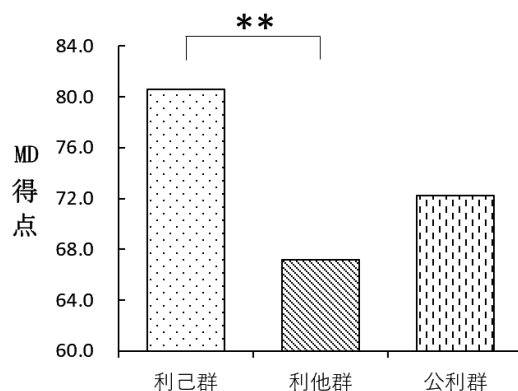


Figure1 各群のMD得点

考 察

利己的価値を選択した利己群は、利他群より MD 得点が高いことが示された。すなわち、利己群はジレンマが生じるときに自己中心的に判断することが考えられる。これによって、選択した価値による群の分類方法は支持されたといえよう。ただし、利己群と公利群の MD 得点において、有意差を得るまでに至らなかった。今後の課題として様々な場面や状況の道徳ジレンマ課題を作成し、条件を追加することで、どのような状況で MD は生じやすいのか比較する必要があるだろう。